

変容をもたらす与えることと受け取ることの循環

シッダ・ヨーガの修行、ダクシナーの解説

マーク・マクローリン

シッダ・ヨーガの道においてグループルニマーの月は、シュリー・グルをたたえ、崇拝する時であり、シュリー・グルが惜しみなく与える祝福を熟考し、シュリー・グルの恩恵が私たちの人生にあらゆる形で表れていることに感謝する時です。グループルニマーの月のお祝いに不可欠なものは、ダクシナーをささげることです。

ダクシナーとはグルに金銭的なささげものをする修行で、シッダ・ヨーガの道の中心的な修行の一つです。生徒がダクシナーを定期的にささげると、それは与えることと受け取ることの力強い循環に参加することになります。

与えることと受けとることの循環は、森羅万象の中にその多くの例を見いだすことができます。川、湖、海の水は蒸発して雲になり、雲はその水を生命を与える雨として降り注ぎます。植物は空気から二酸化炭素を取り込み、酸素を戻します。動物はその酸素を吸って二酸化炭素を出し、そのようにして地球上の生命は維持されます。農民は土地を耕して豊かにする努力をし、次に土地は食べ物となる作物を実らせます。そしてその食べ物は、農民や地域の人々を養います。どこを見回しても、与えることと受け取ることの循環を見ることができます。そして私たちは、この循環が生命の活動を養いながら自らを維持するさまを見るのです。

古代のヴェーダの賢者たちは、ヤジニャ、すなわち火の儀式を、与えることと受け取ることの循環になぞらえることを追求しました。ヤジニャで、儀式を執り行う僧侶は、聖なる火にアーフティス(供物)と呼ばれるささげものをします。聖なる火は、あらゆる創造物の中に存在する大いなる意識の光の象徴です。ヤジニャは崇拝の一つの行為なので、僧侶は最高のも——ミルク、ギー、蜂蜜、穀物、ゴマ、米、そしてその他、自然の豊かさの象徴をささげます。ヤジニャをささげる者は、いかなる恵みもその儀式から与えられても、それを選べないことを理解しています。——それは神聖なる者の領域が決めることです。彼らのダルマ、すなわち義務は、与えること、寛大なささげものをするということです。

ヨーガの修行を組み立てた賢人たちは、ヤジニャの根底にある、与えることと受け取ること、の原理から靈感を得ました。いろいろな意味で、ヨーガの修行の多くは、ヴェーダの儀式のアーフティスとよく似ています。彼らは精神の生徒に、自分自身——自らの思考、言葉、行動——を神にささげるように導きます。『バガヴァッド・ギーター¹』や『ヴィジニャーナ・バイラヴァ²』のような教典が勧める瞑想の修行では、大いなる自己の光は火として考えられます。知的活動や感覚で知覚する対象物をその火にささげることによって、それらは大いなる意識に溶解します。他の例としては、チャンティングやマントラの朗唱があります。人は神聖なる者への称賛と祈りを豊かな声でささげます。そしてセーヴァーでは、グルに無私の奉仕として行動をささげます。

同じように、ダクシナーの修行は、自らをささげるこの神聖な伝統から発展したものです。ダクシナーは崇拝の一つの形であり、労働の成果を神聖なる者の光にささげる方法です。ダクシナーというサンスクリット語が持つ伝統的な意味の

一つは、「生徒が先生にささげるもの」です。この与えるという行動を通して、生徒は先生から受け取った知識の価値を認めるのです。

すべての精神修行と同じように、ダクシナーは、利己心なく献身的で正しい理解で行われたときに、最も深い達成をもたらします。弟子が規則的にダクシナーを実践すると、それはグルの恩恵が始動させた内なる変容を促進し、そして最終的には、弟子はグルが体現する境地に確立を遂げます。グルは、至高なる大いなる自己の豊かさと完全さ、すなわちプールナターを達成しており、それは美しい満月として表現されます。ダクシナーをささげるとき、弟子は、サーダナーの成果である自らの大いなる自己の豊かさと完全さの認識は、シュリー・グルの恩恵の輝く慈愛の中に存在することを理解します。

『チャンドーギャ・ウパニシャッド』の中にある物語は、ダクシナーの力を美しく描いています。

ある日、貧しい家に生まれた探究者、サッチャカーマ・ジャーバーラは、ゴータマというグルのところに行って生徒にしてくれるように願いました。サッチャカーマは、絶対なる者、ブラフマンの知識を学びたかったのです。グルはサッチャカーマを受け入れました。しかしながら、ブラフマンの知識を与える前に、グルは 400 頭の痩せて虚弱な牛を与えて、よく面倒を見るようにと指示しました。

サッチャカーマは、草を食べさせるために牛を森に連れて行きながら、自分自身に誓いました。「この牛が 1000 頭になるまで、私は先生の元には戻らない」。サッチャカーマにとって、増えた分の牛は、自分の努力によって生じた財産であり、仕事の成果としてグルにダクシナーをささげられる可能性を意味するものでした。

何年も、サツヤカーマは森の中に住んで、愛情を傾けて牛の面倒を見ました。サツヤカーマがとても誠実に世話をするので、牛たちは強く健康になって増えていき、ついには 1000 頭になりました。ある日、牛の群れの雄牛が彼に言いました。「おお、サツヤカーマよ、私たちは 1000 頭になりました。私たちを先生の家に連れて行ってください」。サツヤカーマが驚いていると、雄牛はさらにブラフマンの一つの側面を説明しました。

サツヤカーマがグルの家に戻る旅をしている間、毎日、自然界のものや動物がブラフマンのさまざまな側面を説明しました。最初に、小さな火がブラフマンについて彼に説明しました。その後、野生のガチョウ、それから水鳥も。驚きながら旅をしている間に、サツヤカーマは絶対なる者の輝きと無限の広がりについての深遠な教えを受け取りました。

サツヤカーマが 1000 頭の牛を連れてグルの家にとどり着いたとき、彼は達成の光で輝いていました。ゴータマは喜んで、「お前はブラフマンを知る者のように輝いている」と言い、「これらの教えを誰が与えたのだ」と尋ねました。

サツヤカーマは答えました。「人間ではないものが、これらの教えを与えてくれました。しかしながら、敬愛するグルよ、私は絶対なる者の完全な知識を切望しています。どうか私を導いてください」。するとゴータマは、サツヤカーマに残りの教えを授け、サツヤカーマの絶対なる者の理解を完全にしました。

この物語には、ダクシナーについてのいくつかの重要な教えが含まれています。サツヤカーマ・ジャーバーラは、神を知りたいという強い切望を持っていました。ですから彼はその知識を与えてくれる師を探したのです。痩せた牛たちに草を食べさせるために森に連れて行ったとき、サツヤカーマは意図を定め、グルにささ

げるダクシナーを持って帰ると誓いました。そして、彼はささげるという自分の意図を誠実に守ったので、グルの恩恵と知識が彼の周りに注がれているのを知覚できたのです。火、動物、鳥そして貴重な牛たちは皆、サッテャカーマにヨーガの洞察を降り注ぎ、内なる知識に火を灯しました。この物語は、グルと弟子の関係の中心に存在する与えることと受け取ることの循環の中の、与えることについての重要性を見事に描写しています。

ダクシナーをささげるとき、与えることと受け取ることの循環に参加するとき、弟子は与えることへの集中を維持することが重要です。アフティス、つまりヤジニャでの供物をささげるように、サーダナーに自分自身をささげる行為は、弟子を限界ある概念から解き放ち、弟子自身の本質に戻します。『チャンドーギャ・ウパニシャッド』の物語が伝えるように、弟子はサーダナーの成果は正しい時に訪れると信頼します。

これが、ダクシナーをささげることを、他のヨーガの修行と同じように、期待を持たずに行わなければならない理由です。無私の態度でグルにささげることで、弟子は寛容さや感謝などの美德を培い、そして自分自身の生来の純粋さをさらに体験する力を育てます。恩恵と真の知識を与える者をたたえることで、弟子はその知識と一つに——大いなる自己の至福と一つになるのです。

© 2016 SYDA Foundation. 著作権所有。

¹ *Bhagavad Gita* 4.27.

² *Vijnana Bhairava* v. 149.